

はじめに

●「越境による共生と和解」の平和学を目指して

平和学を学ぶ上で、私たちは平和学を「科学」的な学・学問として位置づけるべきなのだろうか、それとも、哲学、宗教、芸術などを含むものとして捉えるべきなのだろうか。私なりの答えは後者である。すなわち、平和学は学・学問の狭い領域や「象牙の塔」にとどまってはならず、平和運動、平和哲学、平和芸術などを網羅する総合的かつ学際的なアプローチをとらなければいけない。

『デジタル大辞泉』（小学館）によれば「科学」は以下のように定義される。

《science》一定の目的・方法のもとに種々の事象を研究する認識活動。また、その成果としての体系的知識。研究対象または研究方法のうえで、自然科学・社会科学・人文科学などに分類される。一般に、哲学・宗教・芸術などと区別して用いられ、広義には学・学問と同じ意味に、狭義では自然科学だけをさすことがある。サイエンス。

本書では平和学を哲学・宗教・芸術などと区別せず広義の「科学」として捉える。その場合、いくつかの課題が生まれてくる。たとえば、どこからどこまでが平和学で扱うべきテーマや問題領域であり、どこからが平和学の守備範囲ではなくなるのだろうか。この線引きはきわめて困難である。構造的暴力の視点に基づく場合、日常生活の不条理や差別、偏見、貧困、環境破壊などほとんどの課題が平和学の問題になるためだ。

本書のファーストドラフトを執筆している「いま」という時間軸は最初の「米朝首脳会談」が開かれた2018年6月である。朝鮮半島の非核化や朝鮮戦争の終戦、平和協定、国交正常化、南北코리아の和解や統一、東アジアにおける冷戦構造の脱却など、さまざまな政治・外交的な交渉、そして今後進む、または膠着^{こうちやく}する状況を、平和学または平和をつくる実践活動にたずさわる人びと

はどこまで「科学的」に、もしくは「客観的」に分析したり予測したりすることは可能なのだろうか。

私事ではあるが、私が初めて大学の非常勤講師として教壇デビューを果たした科目は「平和研究入門」というものであった。それがきっかけとなり、私は前任校で全学共通科目「平和論」の専任教員として本格的に平和学について学び、また悩み始めた。振り返ってみれば、当時は私の学問的な原点にあたる国際政治学（国際関係論）と平和学の違いを十分に説明すらできないまま、部分的な違いを明示化する程度にとどまっていた。後に詳述するが、平和学を学ぶ上で、個々の立ち位置やまなざしはとても重要である。つまり、「平和」という概念はきわめて文脈的であり、状況によって変わりうる相対的な状態であり、プロセスなのである。

私には平和学と関連するいくつかの思い出話があるが、それらが本書『越境する平和学——アジアにおける共生と和解』の着眼にかかわる具体的な動機につながった。したがって本書の導入部であるここでいくつかの体験をまず読者と共有したい。

ひとつ目は書名にもあるように「越境」についてである。私は生まれた時から国境を越えていた。言い換えると、日本で外国人として生まれたのである。そして、日本と韓国で長く暮らし、いくつかの国で短くは数か月から1年くらい滞在した経験がある。現在は日本に永住する在日外国人として生活を営んでいる。好むと好まざるとにかかわらず、日常的に複数言語の電子メールのやり取りをし、新しい言語習得にあこがれては挫折を続けてきた。多くの国・地域を旅し、かつて訪れたことのある地が別の国名に変わってしまったことも経験してきた。ある意味、私にとっての越境やトランスナショナルな環境は、意図的に求めるものではなく、私の存在自体につながるともいえる。そのために、越境という概念は、私にとっては最も基礎的な方法であると同時に、生き方としての価値や理念でもある。

2つ目は、本書の重要なキーワードである「和解」のあり方についてである。私は2001年に、アジア太平洋の若者たちが集い、一定の時間を共に過ごし、ながら平和や開発などについて議論をするネットワークづくりのセミナー企画

に2週間ほど参加する機会に恵まれた。たった2週間ほどの共同生活とはいえ、睡眠時間を除いては不自由な英語を使い、異なる文化圏の人たちと過ごす。ハラールしか口にしない人もいれば、ベジタリアンもいた。コミュニケーションにおいては自然と英語が流暢^{りゅうちよう}な人の発言権が高まったし、なんとなく年上の意見を尊重する配慮もはたらいた。同じ目的で参加しても平等にはならないし、公平さを配慮していながらも仲良しグループは個別に形成される。「共生」という言葉は「平等」「公正」という概念と近いようにも感じ取れるが、実生活の面では理念どおり実現できるような、そんなたやすい概念ではないことを体験した。

その年の企画は日本国内で開催されたので、私は参加者の一員として初めて広島平和記念資料館と原爆ドームを訪れ、見学することができた。数か月後、ヒロシマで感じた体験について、東京に暮らす外国人あるいは英語圏コミュニティの人びとを前にお話しするチャンスがあった。私はその場で「ヒロシマの展示・表象には日本の被害者性を通じた原爆の非人道性は受け止められるが、アジアに対しての侵略や加害者性は相対化されていると捉えた。そのような課題を今後いかに克服できるか否かが和解の鍵になるのではないか」、という趣旨の話をした。被害と加害の両面を重視すべきという視点であったが、時間の都合もあり、その場で韓国軍がベトナム戦争で行った虐殺などについては具体的に触れることはしなかった。セッションが終わるや否や、自身をアイルランド出身のカトリック修道女（シスター）であると名乗る人が私のそばに寄ってきて、「あなたの話は良くありませんでした。和解は祈りと赦し^{ゆる}を通じてしか成しとげられないのです。私は植民地を経験したアイルランド人ですが、イギリスに対しても、宗教的な祈りを通じて赦しを施している。あなたの話は被害者性を強調するので、ぜんぜん良くありませんでした」という苦情というか説教を始めたのであった。かなりご立腹の様子でもあった。数日後、ていねいに同じ論旨の書簡まで頂き、「あなたの話はまったく良くなかった」という話を繰り返された。私は、加害者と被害者の対話を通じての和解を求めている。けれども、被害者側による「赦し」のみが唯一の方法であるという主張には違和感を抱くためにその時のモヤモヤ感が正直、いまだ十分払拭されない。

この体験から痛感したのは、普遍的な概念である平和への取り組みは、きわめて個別のかつ文脈的な理解と試みが必要であるということであった。平和について考え、平和を一緒に創る人たち同士でも立場や理解が異なるために、争いや葛藤が生じることをしばしば目撃する。それほど平和にかかわる問題は脆いし壊れやすい。

そして3つ目は日本の平和研究の立ち位置についてである。2005年に中国の北京で開かれた「対北朝鮮人道支援」にかかわる国際会議に参加した際、韓国からの参加者のひとりに、日本の大学で平和学を教えていると自己紹介をした。その時のその人の反応が忘れられない。

「平和学？ それって何ですか？ そして、日本に平和学という学問があるなんて意外ですね……」といった感じの疑問が返ってきた。その会話の行間から読み取れたものは、日本は加害者であり、被害者であるアジア諸国に対して、いまだ歴史的な清算や謝罪は不十分なのに、日本で平和学が積極的に取り組まれていることに違和感を覚える、といった感じの無言の問いかけであった。その瞬間、「あなたは被害者意識から脱却できていない」と言わんばかりのアイランド人宗教者と私のまなざしが重なった。被害者はいつまでも被害者、加害者はいつまでも加害者の立場から脱却できない構図の再生産とでもいえるだろうか。

和解や共生を考える際、だれが先に和解を提唱し、どのような関係が形成されれば和解が成り立ち、共生が実現するのだろうか。被害国の国民はいつまでも加害国の国民に、過去の責任について追及する「権利」があり、加害国の国民はいつまでもこの責務を負うのだろうか。要するに記憶と記録（歴史）、正義と真実、国家と民、越境と共生などをどのように考え、模索すべきなのだろうか。

ベトナム反戦市民運動を率いた作家・小田実の言葉を借りれば、戦争は加害者性と被害者性を同時にはらむ暴力である。日本はヒロシマ・ナガサキの被害者であると同時にアジアの植民地支配や第二次世界大戦の加害者でもある。日本における平和研究のあり方、特殊性、ユニークさというものがあるとしたらそれはなんだろうか。

平和学を教える立場になってから十数年が経過した今日まで、そのほかにも平和に関する疑問や悩みをいくつも体験してきた。たとえば、自然災害に対する救援活動を例に考えてみよう。「千羽鶴を折って海外の被災地に送りたいのですがどうすればよいですか」という問い合わせがあるとしたら、あなたはどのように答えるだろうか。「祈る平和だけでは世の中は変わらない」「被災者にむしろ迷惑だ」「被災地とつながりたいという気持ちや絆はとても大切だ」「その思いが更なる災害への備えや、支援につながる原点になるであろう」など、多様な立場や見解を読者のみなさんも抱いているに違いない。

祈る平和と創る平和。この言葉は静的な平和と動的な平和に置き換えられるかもしれない。長年の間、日本の平和は祈る平和が中心であったかもしれない。教育や研究を軸とした日本の平和学もどちらかといえば静的な平和の性質が強かったであろう。最近は創る平和に関する議論も活発になってきた。そして、それらの平和のあり方をめぐり、政治的な立場やアプローチもさまざまである。理想主義と現実主義。そもそも平和主義を表立ってうたは謳わないけれど、きわめて平和的な人たちもいれば、平和のために暴力や軍事的な手段に訴えることもかまわないと考える人たちもいる。

日本における平和学の源流はどこにあり、そしていま、日本の平和学はどこへ向かっているのだろうか。日本平和学会の研究大会や研究会に顔を出してみると、他の隣接学問領域の学会（たとえば日本国際政治学会など）よりも大学院生や若手研究者の参加が少ないことがやや気になる。この点について以前、学会の関係者たちと話したことがあるが、日本では平和学という分野が確立していないことに原因があるのでは、という話題になった。言い換えると、平和学はいまだ日本の学問体系としてきちんと根を下ろしていないのかもしれない。そのせいだろうか、税金による科学研究費などの助成申請においても平和学という項目が存在しない。高等教育課程の編成をみても、平和学部や平和学科など、平和学を専門的に学べる取り組みが一部の大学や大学院に限られている。初・中等教育課程における平和教育や人権教育は質的には形骸化している場合もある。平和を声高く唱えることがちょっぴり恥ずかしいような空気すら漂う。また最近では道徳教育などが重視されることから愛国心やナショナリズム

ム、国家主義の視点も強化されている。政治学や安全保障研究との差別化が十分できていないために、平和学に関する関心や優先順位が低いのかもかもしれない。以上がその学会で関係者と話し合った内容である。

昨今、〇〇的(型)のさまざまな平和へのアプローチが混在すると見受けられるなか、大学における軍事研究などの議論も物議を醸^{かも}している。時代と状況の変化があるとはいえ、だからこそ日本や世界で平和学が生まれた源流を求め、現在と未来の平和学のあり方について考えてみたいと思った。

本書はそのような個人的な関心や問題意識から生まれたものである。当初は、私個人の単行本として構想を練っていたが、行動するアクティビストや行動するジャーナリストという人生の先輩・同志たちの力を借りて本書の具体的な執筆に取り組むことになった。

本書は平和学を教える教員や平和学関連の授業を履修する学部生・大学院生の手にとってもらい、今までの平和学関連の書物や研究との比較材料、そして延長線上の文献として活用していただければという思いがある。さらに、平和というキーワードを全面的に意識しない人であったとしても、ジャーナリズムやアクティビズムの現場で活躍することを志す人たちに読んでいただきたい。もちろん、現場ですでに活躍している人たちが初心に戻ったり、自分自身を省みたりするためのツールとして活用していただければ、これ以上にうれしいことはない。いつも思うことであるが、このような類の本は公共図書館や大学図書館だけではなく、街中の喫茶店、町医者^{まちいしや}の待合室、そしてミュージアムのショップなどで、高校生や子育てで忙しい保護者、退職してこれからやりたいことにじっくり取り組もうとしている「リカレント世代」の目に偶然、とまることを夢見ている。子どもや孫の卒業祝いに贈られることを想像してしまうのは私の妄想癖が度を越えすぎているだろうか。

本書を一読する前に、目次をじっくり眺めていただければこれまた幸いである。本書は3部構成になっている。各章の流れについては第2章でふれるので、ここでは各部のおおざっぱな流れだけを紹介したい。総論そして理論的枠組みにあたる第1部「現場から考える平和学の方法」では越境、共生、和解の3つのキーワードを用いて平和を再検討するための概念操作を行った。なかで

も方法論としてのアクション・リサーチを紹介し、また論文執筆ではなくドキュメンタリー制作という表現手法から読み解こうとしている。

第Ⅱ部「平和への視座」ではエスニック・タウンの境界区域（コンタクト・ゾーン）、アイデンティティ形成の空間としてのエスニック・スクールの事例分析を通じて、日本という空間の内なる越境と共生問題に焦点を当てている。つづく第Ⅲ部「平和へのアプローチ」では、戦時性暴力をめぐる記憶の旅、フィールドワークの体験、難民問題の映像化などの事例を通じて、いまを生きる私たちがどのようにこれらの問題の主体になりうるのかを問いかけている。

最後に安田菜津紀さんと私の対談を設けている。安田さんを対談相手に選んだのは、彼女が、本書で執筆者たちが抱えている問題意識を現場で実践している「越境する平和学」のパイオニアであると思うからである。私たちからの対談要請について迷わずご快諾いただき、また、お忙しいなか「刊行に寄せて」まで書いてくださった。多くの読者にとって、安田さんの生き方がロール・モデルになればうれしいと思う。もちろん、大変なことも数えきれないほどあるだろう。でも、第2、第3の安田さんが生まれてくれれば、世の中はもう少しだけ平和になる気がする。

さらに、コラムにも私たちの情熱と愛情がもれなく注がれているので是非読んでいただきたい。紙幅の制約から各章で十分扱うことのできなかった方法論的な説明や表象のあり方、個々人の体験や視座などについて率直に触れている。これらの語りは、私的な語りで終わらず、特殊性を一般化するための、ひとつの鍵として作用している。本文と対談をあわせて楽しんでいただけると確信する。

本書の刊行を契機に、私たちは今まで以上にさまざまな場所で対話を試み、現場を増やしていこうと思う。みなさんと平和についての対話ができることをとても楽しみにしている。

2019年5月

編著者 金 敬黙